

鑑夷通紀

戰記

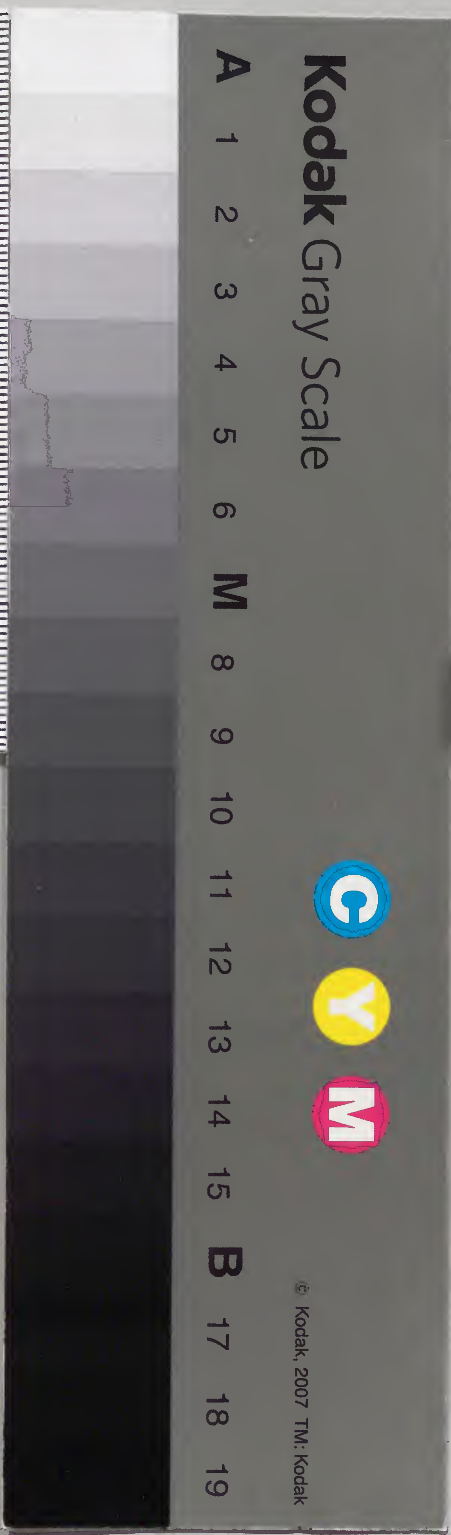
姫

庫	文	閣	内
一五	三	三四七〇九	和
函	三	冊	書
七	三	號	類
架	冊	架	

(五方)

内閣文庫	
番號	和 34709
冊數	33 (5)
函號	151 60

共冊三



盛衰通化卷第六

目錄

維城氏的印色澤念為之事

肥田金我國府及戶討死之事

肥田金我國府及戶討死之事

一五港我則村也合我澤念替如子紀

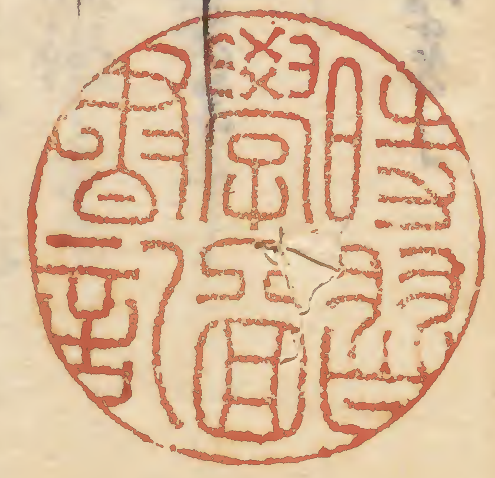
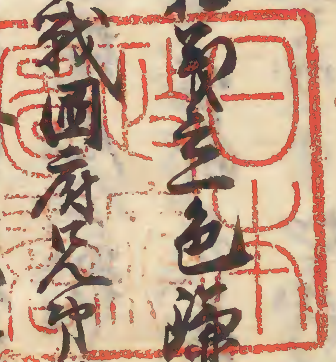
一五港我則村也合我澤念替如子紀

付一五港我則村也

因維城之印自國城中度付之事

予子紀的許也山氏而路事之事

予子二五責維城之誠當如法討死之事



赤松子父子流罪之事

赤松子居於社未修故改爲西公帝討死之事

修城居故修修故討死之事 氏將軍之事

氏將軍之事

古河城貴族討死之事

春王反安王反之事

天下妖怪記派自長列流布之事

安藝國極尾合我之事

天下怪異事所及奇怪山王院室之事

日吉山王之事如屋緣記之事

赤松海社入江具執事將軍教之事

赤松海社流擧列事

赤松進討宣言付持之夏之事

赤松討子法的中向擧兵自海坂軍之事

海社入江事人九塚付事勢和贖事

山名定安軍付赤松就門与上京社先未討死之事

赤松城攻付赤松則尚同義雅降事

赤松城之守夜付海社入江自害并流罪之事

山名武敏切骨并癩武事

赤松教原流擧列自害

付在子則繁山田流罪之事

以上

盛衰通記卷第六

後醍醐天皇を三之孫念成とす

持氏自害の事憲実と出流し長株と改名し合中法方の事
三年甲子より差候とて山内と佐々木と云ふ事
持氏の子七人ありき嫡子ありて自害あり二男と云ふ事
五丸四男と云ふ事
雪平と云ふ事
乳母も懐中に入りて一有知人あり
志しりる事

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 持氏 and 自害.

性既向て退治せしむるに別長尾左衛門尉侍を以て武蔵
向てむ性既ハ其林幸仲ハ入石川ノ陣キ又隠念より一高松元
守等より加勢を乞ふ仍てお軍より中教平とお差以隠念入
及長尾よりよりその時長尾ハ西進を以てしてよく相と戦
及代より尚軍既進言知陣中是後戦言一の討ふ之款を
おれも後向て来よりハ中教中務約房長尾の勢二千餘人四月
十六日弟より乃より二百人よ及びより五月朔日源念一云又
上校性既長尾幸仲おも左何致向とやめて後戦一向ふ之陣介時
言ハ五百餘騎して海よりと戦國キ四言此高松十百人よ及び
長尾も討ふと戦一々も中教平再之よ及少左四言言侍且
と立て山向一月より五月十日武蔵北郡石川ノ陣してとを後りり

一之謀叛武州村會合我源念勝りて自死す事一
一之六月十三日逐電一武蔵國氏出方よりこれ始り又四
好まうとひて利根川を渡りて上郡山ノ岳より七月朔日此
夜いそぐ百十人して利根川を渡り武蔵國新田郡豊後佐志
重政入たり此豊後佐志一入江第一人も捕らる討たて置り
銀一川たりりてはるかられ多く左河責より来りて先後戦一向りんと
及ふしより上校性既長尾幸仲おも中教平銀一京一之ハ武州
大里郡肥後といふ処一出て款をまつ上校長尾ハ中山及より
徳義の言よりとよせたりと我ハ一之言ハ毛長之河ををせ加
一之より先陣中教平侍言とて我下高松と被取一之を大を布り此高
松上河高松と進せしむるに石川を越て村高と進けりてと

悔のまゝに下りて尾尾に返りて一戦を敢ふに敢ふ
後りより以時上校持約の武勇を以て陣せしむ性烈と称人とす
よを軍を以てこころを捕ぬしゆめくしむに持約の勢ハ甚固ハ分
いし下りるよ又捕を以てしゆめりの後敵ハ一味の志ハ七月十
三日上野を立て里利の町に陣布り持約の妻子松尾清平兼波
四ノ下を以てしゆめり九人を討たしむる愛ハ甚烈ハせしむ出陣せし
七月七日立野に陣し本原子とらふめし亦日ありて夜ハ八月九日
下野山山底祇園村に志しより以時佐佐木大舟海あり持約
志まを以てしゆめり進軍次第ハあつて又ハ一在上校を以て分
陣し上校佐佐木ハお模法を以て蘇麻与の下種名に陣しお模法を
野園中又お模法を以て蘇麻与大森何屋を以て蘇麻与ハ先君不登三の

こころを以てしゆめり後法を以てしゆめり今川上徳介
範忠二千人を以てしゆめり陣し是も同しく押下しを南生播
磨吉妻友と名人由は得た場し陣しお模法と名人太森也
押下し在法城の後法よりおはしりし

一色重信持武田信賢を討ち一色重信討死す

大和必しも一揆起す一色重信終初とすやあひいふ
初め重信ハ大和必信人甚保大和を以て一族とすこころい海兵を以て
兄の重信ハ徳念を以てしゆめり信下しを以てしゆめり志貴
細門下城とすこころい子海人ハ城とすこころい仍て高木細川持之志約し
同持武田持法を以て松原村に持法木七子人由は得た場し陣し
志とすこころい重信ハ向ふ一色重信城を以て勢を以て圍れてハ利を以てし

とて二人を敵と知て一人を敵と知て世保大和をわけて
仰せしむ時に出てあり此等をやさ或ハ夜討しるありあは城
とありとくを重しとて世保ハ二と小トありとも此城叶ふ
と一夜打して御方を決して去るは城申此城智深と云ふ
ものありあは此志松の方を討入る矢みありとて西内意ありてハ
ぬくくありとてそくは城方を取て津歌しその子の命亦亦人と
ハ陣をくく傳しきりありとて討たうとて西内意ありとて後上
とて世保ニよとて夜討し大上京將と知る事傳はるくはけ
ゆりうは軍とありとて此とて討たうとて西内と云ふ人々
海林と知しとて世保ハ二と作もありとて武田信實ハ度法中務
とありて二とをゆきくと討たうのしかくは武田ありてハ是なり

ひたに討たし作付られしとて重し侍あり人々よくありとて軍い
とて一とて武田ハ信實の信實收の御門山と云ふ改くは二と
武田ハ二と教ひしとて此をたきとて討たうとて武田信實ハ宗
とて七と力とて中上教ひしとて二と軍とて武田ハ首とてと
世保大和も遠電し此の志を好くともとて城と云ふ
とて教ひしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ものありとて

田代城 田代中夜討事

此日限しとて此方此城を圍む大上熱くは御方上
めては左の軍は上夜討た右の軍は六教の命を殺す武田
とて宗信松山并し武田ハ一揆平一揆放て熱地十万人

大おし矢風尚て川せんとてち後及尚及とらん中より高野新

人教ありぬもちり矢はハ定くハゆえ一矢仕りしとて小田原の義経の

庶兄八田刺友先甲矢をひてち後を村りし希希をひち甲矢を面よあき

くうてせんごんの板を村ぬらち後うらの拘りけし村込らわえ

を山に仰死しち後ハち分ちつ希希も是をいとくうり尚ハい

ふま中せあり希希をひ矢をひて出うち甲肩より中を胆とく

さ神事りの良きてくまて村込らわえ二言とも石云死うりたり

三人張のりよ三年竹の良きるを押しり篋をちる吾子よ十三

束三伏ありをひて村らちちわくくくわわハ軍勢ハ川之を

桃井出ま系も勢力をてて城ハ川入る高野矢二節よて城をを

るくハ入るあ代希希とくくく酒の別ハこそわわらわハ面

くき火し軍ハ山よりけ付城より打て出ハ希希ハあてて後

をくくく又後城の智謀為しと許しり

東下地子流罪之事

其代將軍教の幕下小東下地も益之入た希希のいふ人あり欲

人よを五年にしと意して將軍ハ信ふ教はたを好むい去る

寛永二十九年十二月將軍教此身ハの舎よ希希并雅世今川

貞世ら後希希院寛仁法京寛孝ホ十三人あり希希ハ者十一款

よて歌よ一首ヲ歌よみしに知所希希相亭下よて法事あり

の魏耕雲批点せしに益之その探よあつくり希希して世よ名を

取せり子息希希も下地希希よ信せしれ同歌ハの秘を傳しといり

るる人の誤り希希的に入た父子ハ強くハ持氏ハ志を尋し將軍と

窺ふより一決りたるを以て其を紀の不及其の八国防出(死流)
子息が縁はあらず事放しよあられ同のさせられ番人を付せられ
空矣此路の事と人々

將軍石原の社未結城責葛西八市討死の事

永享十二年も言て永享十三年改元ありて嘉永元年とあるその
二月十日將軍石原の儀言(社未あり)板屋守政延川の事とせあ
て信使有る一六法あり二よりて許定あり其に下信使任人忠
本右衛門の難城一よりなる事と忠告せしつ不忠二此朋友は計
計りし忠告も此中よりある事本は城守有る事と忠告せしを
志すより一法あり七よりなる事本より一何とぞ降参して城を収
束せよい計りあり一事と忠告せしは一と忠告あり一と

いよりりたる事とは城守(火を放さん)との約束より一拒りたり
あまの四右衛門忠本と力ありて四万十百人せめりる城守一五人
時の忠告を合せてすちりけり一とされ城守より一火を放し一
あまの多くは忠告も此中よりある事本は城守一小山大信を大抵
并学互に入らるる一とされ城守も既より忠告せし一とされ忠告
此北任人四右衛門忠本が忠告も八市討死と名付りて四千人あまの
力を以て城をたぐるの法はさあつて一とせしとせしとせしとせし
城守が一ひるも忠告を忠告も忠告も忠告も忠告も忠告も忠告も
高知を始め武田勝つあ入んとせめ付りて一とせしとせしとせしと
大言より一高知とよひけ例の矢を以て八市を渡の法を分りけり
よき付の板(堰)板をせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと

進まうて纏まりさへ九割一割のそと糧を以て息つて居り
不款は社いんくすなり

氏朝以下法討死す事

家系大の法言はかくさひ切る敵をたぬあふんとせむとて
も多く抱き下一言をゆて敵はあせしふとて法刑殺少降路の
さへ是程を討て一ちうとて二人も捕まひさうとて二百餘騎
る此首と首首上さませに坂東八年氏朝死此七堂も一ち敵人よ
はつらうち敵はさうけし氏朝よ向ひかくとてさうとて
も也甲と脱て降る余はく人さし此堂よりうんといふわを
氏朝に討たさうとてさうも氏朝と相て首たて忠告上討つ
とてさうとてさうとて氏朝とち敵と戦ひあふくあむい

一うち敵少降ぬあすその法武死七堂八年氏朝合せん一ち
友らあふく降れよち敵も痛も有て危り一ち帝も助けのれ
一に上敵討つ以下あふく討てくはは軍は氏朝を捕百ち
人さうわて中降路よぬさうとて氏朝兵よあ息あひいさ
さうわち十夜のもあむ目的あむも大幣の中一さうん一
あ款さうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
氏朝に護の事さうとて法言切あさん威も中法して中言は
ものさうとて切あさん法もあさうとてあさうとてあさう
よ高降ぬあふくとさうとてさうとて法のとくあふくとて
さうとて今一軍して討死せんとてさうとて氏朝は年甲は七帝先
久二年乙二帝の急十八女たさあああ十八女時の人へ是とあ

ふくがく一まうぬ長のは再ひ隠くられまふとまうてぬ氏
とせしむは人又ゆき氏物う赤子にまうぬ一ハぬれとら
いさむ出てた陸の佐竹とよのまうて年月をまうては陸城七郎
と名のり成氏出世の以七郎も十三郎もよて五郎もよて再ひ
陸城本成とまうりぬ物とまうりハはまうて此知子とるり
又中山と接ぎ又足月ハ致場を打やう屋の一ハ毛尾園傳とよ
と御あり

同十七日陸方の少くは一ハ時の竹本毛尾憲宗は事下法の程を
星の曾に遊教おころとまうひもようけ遊下治教とまうり
思東に接ぎも毛も曾とまうひはようけは赤人付役よて首實檢
一ハまうてまうりハ首實檢とまうせむむりハ首實檢よは

ふくは傳ありて極々の礼法ありも教方のまうて首實檢をま
て實檢の庭一おまうりハまうてまうるぬ實ありとまうり

古河城責まぬ討死にまう

ある元年四月十日陸城本成一ハわて古河の城よあふ地田
ちまう先夫の太炊とまうりハ十七日北条の別ハ地田後成とま
口一ハ七方六方ぬ陸とまうりハ地田ちまう先安きハ不叶と
ふひん赤本とまうりハ一夜中ひらうよ城とまうりハ毛とまうり
あつり陸城とまうりハ今ハ赤部親其本一族赤本僅八十餘人
ぬまうりハ毛も志のまうりハ一謀とまうりハ一此の節よ
赤子とまうりハ人ぬと一ハまうりハ七方ぬ人ハ討死にまうり
あつりぬとまうりハ赤本とまうりハ一ハ討死にまうりハ

元久と号し彼未だ死を自業とせず彼を此に付物とす
や以未だ死由と流布せしむるなりそを子細に二浦介時
より先年上校源秀と号し持氏よりむきし海に世とをらて
自害せしむるなりその嫡子元久と号しふものあり法皇流儀
して大内と称し大内周防に保れ居るとす一邇に保
元久と号し平を以て人のくふりてくあふ道遠せし又
赤松元年二月に赤松とすひ遊し赤松を以て川のむらひよ
ある元久元来は孫ありて包河にふるまふなり入てとすは
小笠原山より赤松も赤松も山底に入てにめきある山一の
部よりしてとす結構なりと見えたり赤松の中に入て赤松とす
て宮殿樓閣を築く上と死し安徳帝二位元平の一族を統率す

山久新田義興をく山久氏法又十五ありと死し有し一歌ひん
しやうり日名山王と山久春日の三神と記されしとありしと
えりし徳より楠公の山久海社よりいし義興を今も
教の軍を統率ししとすは赤松の軍とす一是とするは
ませり赤松とす一は山久の赤松の軍とす一是とす
山久氏法を鬼と以てて佞媚を其の事せ細川持元山久持元を魂
一と楠公秀山久と以てて赤松とす一は山久の赤松とす
赤松とす一は山久の赤松とす一は山久の赤松とす
教の軍とす一は山久の赤松とす一は山久の赤松とす
は彼神を教とす一は山久の赤松とす一は山久の赤松とす
赤松とす一は山久の赤松とす一は山久の赤松とす

隣一ツを奪ひ押月多ひて高門を切るとし之を元北川淵に
くわし出さる一昨日と云ひし一昨日と云ふてあまのくまは
教弘よかくとくくくわをさひ合せらるる者として身女を親妻
と云ふとく婚姻しとく彼元久百重を應て子孫繁昌せし
せふと子孫永くしとく一者としてまことと云ふ今よ元久と
とく是あり同年三月武田信賢とつづく時の神を佐伯親と
親下武田赤負とて懸別極尾の合戦は同六月海越の軍
と戦しとく勇揚の軍に似せしとく是よりとくせしとく
勇取の軍に似し細川持之卒しとく其子孫元盛成とくせん
六年の月ハ記書の記録とくく合符しとくはとく及し人ハ
は末の事と云わたり

安藝国極尾合戦之事

抑おぼゆる後武田大権を人信賢ハ一色重隆と討一切あり
取き欠地ありわととく懸出佐伯の處所社に上りてあり
とく後取し武田ありりり武田也と入部しりり時に神
とく佐伯と佐伯と親妻おとらとく尚社ハ推古天皇御生之年
小宗基あり尚社佐伯と尚社の地と定むるを後平和出徳盛
隆造と加しとく一も後取のも尚社と石坊次や高氏も高敏
河り尚社あり編有りしとく

安藝国佐伯の神者靈驗誠彰也倚為借田佐伯郡
百八十町附之祀猶以尚社八人之由司在副後田自今以後
可事其社將不可祀神威者也其高殿及破壇則早以

勅旨可成程之并山中良材素熟不及運送可為成料
者 諭旨仍執達也件

推古天皇三十二年

在任

瑞生五年十二月十三日

由司件

次下天皇御製長御之御文

安藝國佐治時神ノ安座如及之唱法才佳岸の神ノ
座ノ御波比乃上様ノ御文一ノ御文一乃上乃請ノ凡夫身
と精一如及之如人ノと欲モるものハ内陸岸御佳岸百
無戒一信心と後一綿と以て改及子息と包赤指を一
朕ノ御製解ノ御文御威ノ御文時々御心甚程と如也

銀ノ如及之仍て御文

瑞生五年十二月十三日

心ノ靈瑞ありと今武田ノありしハ根籍ありしを以て佛を一
去あり先使と心ノ御文一ノ御文一今又入教ノ御文あり
御文推古帝ノ御文御文一ノ御文一今又入教ノ御文あり
あり御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一
事柄御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一
ハその方カ一御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一
百餘人ノ御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一御文一
時ハ三月十日武田ニ御文一御文一御文一御文一御文一御文一
上陣を又つ々の小幣ノ御文一御文一御文一御文一御文一御文一

くわいくわいもあまうりくわいくわいん行伍をい
せんとせりくわい雷電激ぬくくわいんとのくまをきりて大
くわいくわいもあまうりくわいん行伍をい

天下怪異事所収怪山王記宣事

有十有六雷くわい白の矢事所の祟くわい又くわい細川銀
落下現上有りくわい又くわい將軍の祟くわい一夜文人志らまり
海は帝社の声くわい物のぬの能とくわい夜くわい人くわい
くわいあまうりくわい三守の人くわい畜人くわい勢有りてぬくくわい
くわいくわい人くわいくわい三守斗くわい色庭有りとの
いふれくわいのくわいくわい世をくわい被れ多く出で衆衆不時物の
ぬの能の交とくわいくわい入て解とくわいくわい二日ありて

死くわい不意とくわいくわい又くわい風ぬ電くわい洪ありて
人多く死くわい石屋ありくわい鳴物やくわい將軍場も鳴物せり
山王七社の神ありくわい後もあつたりあきさけくわい衆衆神衆を奉
りくわい巫口をりて大樹れ不仁くわいくわい國事と亡くわい後くわい石をれ
事ありとくわい託せらるるくわいくわいくわいくわいくわいくわい
疑くわいくわいくわいの能とくわいくわいくわいくわいくわいくわい
人のを信有りくわいあまうりくわい神衆もくわいあひのくわいくわいあま
あまうりくわいくわい人くわい

日吉山王御事加茂御記宣事

敷山日吉神社は延喜式神名姓に近江守流聖部日吉神社と
は比叡の神もくわい山王権現は欽明天皇元元年上自天

大和山破キカミと云ふ降て大和神の神と現をそ存天智天皇位
元年老翁の形を現し一若く吾は是れ大和神の神と現し
まは是時法衣を浦津川より取らば此の神と云ふ大和神
高三の志也昔拘留す佛自南海轉西一山は此神の杖の
下より出づる是地を杖取と云ふ大和神の鬼門を杖取
帝傳教之作し此を合する神社多く此の神と云ふ大和神
此神の神也大和神杖取は秋迎年尼佛杖又法衣を菩薩と
も一山をまゝ子ハ河津陀如杖取ハ杖取の分より二の志ハ
是神ハまゝハまゝ報音マラワト客人志ハ上面報音是白山神定乃
是神ハ十神作の志ハ地衣菩薩中此七社牛の志ハ威徳的の志
大和神ハ鬼門早尾大和神不動の志ハ氣比の志ハ西報音下のハ

まゝハ虚定氣まゝの志ハ文殊支利菩薩而女ハ是也と傳説を
下七社の神作ハ法勅社樹の二菩薩而まゝハ是神の志ハ杖取ハ
在得天女志願ハ赤天天山末ハ摩利支天杖取の志ハ不動の志
大和神の電反ハ大日如來而まゝ子の電反ハ金剛東大日如來二志
電反ハ日光菩薩月光菩薩日台御身ハ松尾大和神と一志ハ
よて大和神の神と云ふ丹塗の夫の地也化知しと云ふ六一
くハ加茂の縁記ハありハ法神と彼山ハ法衣をそ存天智天皇
の志と云ふ又此書神ハ毎月朔日ハ晦日と一日も此神志ハ杖
取後ハまゝハ是れ大和神用神と云ふ一人志ハ二万部の杖取
此神佛之杖取年天工作ハまゝ大和神波浪の杖取者あり
一切志ハ志有佛杖取外志杖取志有靈易と云ふ杖取の志ハまゝ

匠ひて日本に成りしより其の彼原一町の昔の海より今に至るまで
と毎る彼等此に治とあるを波山と云ふ今この山のも
と大言符現密跡此地をありしは移り年歴て人來り華の時
釈迦佛再ひ天竺より來り華東の中は此よりありし時既に
天竺天竺天竺極耳も天竺を大増く折る天竺と云ふ
此地天竺と云ふ代目よりありしは激武鶴草草不台等の世
あり釈も天竺を南よりありしは激武鶴草草不台等の世
と云ふと云ふ多しとの多ふ多ふと云ふ久くは地より我
人來り華の時に今よりありしは激武鶴草草不台等の世
と云ふと云ふ多しとの多ふ多ふと云ふ久くは地より我
變りしと云ふ惜む妙は釈迦既に海と云ふと云ふ時醫王と云

逝東より其の多ふは家一人來り華の時に此地より
我を我を我を我を今釈もよなる道く佛法流布し
お約し東海よりありしは激武鶴草草不台等の世
如來の律より日本紀よの多ふは激武鶴草草不台等の世
と云ふと云ふ多しとの多ふ多ふと云ふ久くは地より我
軒遇密智を新て之を我を我を我を今釈もよなる道く佛法流布し
冊子脹し後ミナをタ言ヘリと云ふは急云ありしは雷と云ふは首とあると
大雷といふ胸とありしは火雷といふ腹とありしは雷と云ふは首とあると
よあると雅雷といふ鹿とありしは雷と云ふは首とあると山雷
といふ足の上とありしは雷と云ふは首とあると山雷
といふ足の上とありしは雷と云ふは首とあると山雷
といふ足の上とありしは雷と云ふは首とあると山雷

い別雷の神よりして河津神よりして依姫のあまは神に如く健
角身余の女ありある時は女津之の山川のまよふあまの衣を
あまの川上今丹塗の雲流りある鴨の母如く依姫を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を
あまの川のまよふあまの衣を

今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り
あま今此聖神の中祠に昔は田中ありて時田の之秧を播種りて
ま高塚よりまてて樹樹とあると母のお依姫樹下は流り

六歳ハ海祐子夫妻并教康七歳ハ海祐子合身在る細川繁
八歳ハ定能隆子夫妻九歳ハ在母能隆海祐十歳ハ中村
淳正一歳モ外能上月柳京下軍令之五七百餘人西院院を
りし能隆をさし去奇しりて海祐をさし去京の大なる管成
持之大内持世畠山持成細川持光同持去志松貞村武田信賢一と
持成山志持光同教信同教之モ外小名あきと有るも此會
さる志松大寸の謀し殞たりしと也志松ハ謀者教士人洛中
洛外出し山志一と畠山志松一と味ししとせ又ハ細川大内畠
山志松と外合身山志一ととせりしとせ或ハ差儀の
能をせりしとせはさせりしとの難説とせし能面と才多
しとはのあきりしとせりしと也志も志松ニ交る時のあき
しと能隆と能一とあきも志とせりしとせりしとせりしと

とせりしと社志松ハやもくし中志一とせりしと二十有量振別
河合源坂の能下志一とせりしとせりしとせりしとせりしと
到せりし七月十四日ハ騎馬のそと九百七騎とせりしと
て海祐ハ將軍の忠告を安んずる持去し志松送志松といとせり
て志松武者志松海祐ハ能隆一と忠告ハ三三三と極を
さしり能隆の綿の上よとせりしとせりしとせりしとせりしと
代々の名義のり我身一生の忠告とせりしと立てりしとせりしと
志松志松能隆ハ是利も能隆せんといと七枚の能隆をせりしと極
の實度し將軍の忠告と志松志松とせりしとせりしとせりしと
志松志松も細川をさしりしと志松をせりしとせりしとせりしと

あね志松を亡くし、いふ事なきをねくし、自害仕りぬいと
どうと休めまふんとせし、流石武門の身おれ全く平
まといふなと下あくと、海濱に流人も惜くなうく、いふ
事うぬ定て、赤松が討ちとり、いふ事なき、討死し、進守死
出れぬ、いふ事なき、進守死、いふ事なき、討死の事、
いふ事なき、海濱の面も、杖と志あり、いふ事なき、

志松進討宣言書 持之安の事

此時、赤松の軍の、いふ事なき、僅か、いふ事なき、傳り立て、
いふ事なき、又、赤松、いふ事なき、編方、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、

いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、

志松討ち討たむるに、いふ事なき、いふ事なき、

編方、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、
いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、いふ事なき、

てくし村志松、後軍四郎又此命を信し板倉集人伏せ考て
先陣海津と論一同士いんさし一々双方の言を平八人うらめり
赤方の二陣武田信俊見よ力とて志せあふれ初め後軍の
赤勢もともよこの戦ひ一浦上中村を赤小勢ありあふよ
らち負さう海社いうてさうも戦ては社を先くしよきい
り

海社合衆人丸塚付赤極和賸物に事

志松海社一人丸塚一寄んき一よ細川持隆八平日海社と志
らし一ありあふらよまき海津よひうらうあり武田と
志松貞村一人丸塚と陣しよ八月十八日よ夜石の上嘉保く
立あ恐天の旨もあふれ海社に道をこ子修人を捕りてちうく

と攻よせ討とらと化うりれ赤勢騒動まうれも武田志松
貞村 志合せせあ戦ふ赤勢多くゆけいれも捕り獲八程海社
勢のよい儀ありいれん丸このあてしんし軍いよと捕りをら
さる如よ志松志高赤勢敵の横合よ打てらる武田
志松海社と戦ひ負て海津よひうらう細川の勢ありれらる細川
ももらうれ一人丸塚と川近よ三軍の赤太旗在候よ
海社海社も入替勢もあふここの戦れいれ川近き人言
とあめらうは討追ふけあり赤勢あふしよきもれをさ
ら細川武田志松もやうあふしよら梅破の湯と志のまう三
ひそくよ謀て福僧とて海社方一りる細川武田貞一人は
客一對し一全く根寄し志松貞村と志松高と取らぬよ

定手於處の討管成が下知しぬも亦いひも事さうき軍に
穿の石徳成よりあせりあふのあれは志松先陣のりよと
扱之よ付て管捕首軍に下上は信成を討てて軍の
んあね軍も管成も同くあふいあは管成を討てて軍の
管成のりよとせりて管成を管成とせりて
おた信成の村の
三人の口上あり大玉の管成を討てて
と出 管成とせりて
人管とせりて管成とせりて大玉の管成と
り志松のりよも是と謀とえて牙とせりて
たがく初平の上の甲斐を討てて

山名定全軍討志松龍門寺上京社光木討死事

海祐はさふにわらぬ子のあふと我んとて人丸塚の味方と
しにしはる口のあふ山名定全軍は大山口の梅原一攻入
とある梅原のあふとあてて陣とてしは梅原を討て山名
と此あふとあてて人丸塚とてしは梅原のりよとて
そふに聞たふりてしは梅原のりよとてしは梅原のりよと
り入替く夜をまうとてしは梅原のりよとてしは梅原のりよと
あせあふらと龍門寺の管成入替りてしは梅原のりよとて
よはらぬとて今に不叶とて龍門寺に下城とて火とせりて
り火のあふとてあふとあふとあふとあふとあふとあふと
門寺のあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
陣屋のりよとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

つてくくあひに不きよき勢き好し大勢こ入しあを直
自中あふ味方の左方長刀は費れて死を被るもの福をさ
中或はあ死或は同生打或は場に入死のの百十一人
手負早女人とを中く一上京三十三人いあわと戦てもく
討死しりけ城のあおるねれ山名父子二人知を放火
し中一攻入り海松守大軍あを包れてあ
あんと管飯と拂い坂中一けりもさきてあつう勢
ちりくさあせし今海松藩代の士中よありて本の山
城よこあつる

本山城攻め 志松別当同弟雅隆某年

山名宗全ハ大子の依ねの和年を以て人にしもあれ八逆の罪

あはあせしとて本山城(と)とせし身をも絶せし
海松小勢あれもおもはせしやせきりうとてあつる
て和略せし大子のね本山勢のほよまを以て一人の切を
させしとあつる人勢をいりち捨て本山城(と)をくれ地を
付て同く城を圍りりあひ八百二人とを以てし武田
も小勝沃を弟は同次弟同三弟足背三人いあつるよらひて
まき後摩磁をあらまのしとく八九人の将をいさけてあつる
は本山城の中玉第一の物にあひしとて海松若おくもあつる海
羊腸をめてのちるす殺十所をいさせとて細勢をいさす大逆
をいさすの勢も城を中村深田一徳に給をれ地をいさす人
法のらよ三年行ののさ付よとてあつるあつるのやとくの
勢の如くありとてあつるあつるあつるあつるあつるあつる

ありし二のちよき御事の大よき事と村よりしるを獲て是を
三人死きて軍勢もさへさへさへさへさへさへさへさへ
牛と村よりさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
は時海社にさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
て城の上のさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
まも不便ありさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
とさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
世のさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
よせつさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
まもよき御事大よき御事大よき御事大よき御事大よき御事

夜の軍よりさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
いさ守令に城の縁をもとめて海社に智恵を命じて海社に
仔細を御事さへさへさへさへさへさへさへさへさへ
しくさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
まもよき御事大よき御事大よき御事大よき御事大よき御事
手勢三百餘人しるさへさへさへさへさへさへさへさへ
おえて城をさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
はさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

小山城を御事大よき御事大よき御事大よき御事大よき御事
まもよき御事大よき御事大よき御事大よき御事大よき御事

御下海社入に合身なるとり別部と嫡子と信希教原とを拓
きてかく親族とて敵上属をとりし他の替上控ていしとありあり
されどもそのよ一族とて後切らんといひあり汝ホ二人ハ
御下海社ひびりて少留大細云海社とありて時を待てしとて
教原河下西川其年又とて死せんとし不左衛門も同く
死せりよせんといふ海社望ていせよ汝等よあをよけて
命あふらんといふは河下其何とてあふらん指下一夜にそれ
哭て心の細とてあふらんといふ事あり西川をく一人ともよ
幼留中をとりしとありありし作し垣下しとあふらん十を亦た
そりあわれぬえ城も出さるんとし海社望てそれ出た謀
ありとて夜打のあふらん二手よあれて御下敵陣夜討しあふ

左馬助ハ三千人といひ御下替上(敵方)一あ後ハ七千人
よを殺て又城入しといふ是ハ城引之をそのあふ敵原
河と知て追うるあふんとあてかくるりし九月九日の夜
子の別志和自村に陸(夜討)し火をとあちあふと殺ひ敵を
九平の人を討て教原河あふよ佐村上月志和以下二十餘人ハ
あふ上逐鹿を安積守配ハ七平の人城中(引入り)夜討し敵を
大勝亡しとるを海社望てあふんしとてあふとあふよあふり
とても力あきしとてしとてあふりしとてあふりしとてあふりし
安積守も浦上高原守也由志和也海社の中村一法ホとあふ
今ハ合戦のあふ百人ハ不足難と二百人ハあふり殺ふとあふ
あふりしとてあふりしとてあふりしとてあふりしとてあふりし

家子方八回十二日未のより八百五十人一同上取り家城をく
おせく中にも中村一徳例のたう大天まで位徳正位人上田之常
を討ちあへておれりさうの川はぬあす人村御りりは
ひまう海城ハ持保をいに入つて家初の頑と是て中死を承
以當城が極言抱一朝受とい早下板切て死すう時辛二支
ありりや常ホ上月深六介階くく己も自害ーく安後社を
と初め浦上常原守社出社在り地海の中村一徳志高先を佐村
彦六上月深六僅十八騎陪居足使合て六十餘人持口とくあ
中よ安後ハ物出りお軍とくよとるくー安後こと名のり
力戦ーまうくぬぬい安後と中村と城入て自害ー英の
中入より家子いあるく中より海城と安後と是もあ

首とれてあは一ゆりり二つ首とハ二条西洞院下梅檀の
本をひてあく門とせりて二つ首と水向よりくあはる
九ハ喜極の家人左ハ角の家人登堂ーくく海城と長
たよあまらゆくぬい後を位と精ー西を位と精ぬる

山名新勲功賞付頼武事後事

此夏の討ち編者といなりーくく身貴も武家の人のまよ
いおのひさーして家所の東竹を陣の元と准ー西は細川
留山初波下り家子ハ二条左府兼良大御所門前府行家
二条園白持基近赤右府房嗣久我門府佐通飛鳥野堂の雅世
花山院門府持太以下列れー先山名父子切たれくとい
海城ハ既の中接應と家令位化を教後備あを教之上はく

大子一向い細川持隆赤松貞村武田信俊一切有賞よ及
ふまをり方一付二系國向持隆山名功も大子の太幣向ふ
在るが自修の事も山名神社あらぬ切の方一一ののふ時
久家四角は山名太子のともくらく人質を出して和平なるを
仁も之様より村に今迄の礼の法中人よりかひるふらまひ
志和使く自村あより軍も裁せられぬにを交自村よ
於ていあてをくしきもてあより山名のおまひを罪死よ
あつるよあつるやそれよ忠告のいれりもあつる一是いと
よ源の事後い初より後い一とくく之説を亡一頼武の再ひ
初は仕一教あつるやとのあつるに家武家よりむと同一
て三つに賞よりれりりく三つに賞をいず和平一り

在よりやあつるの山名功あり一いふさるる源の評多し
らに名とくやを中より自村に面目あつるやあつる病と称一
逼塞せりいり程あつる悪病とてけて死一りるしりや

赤松教康既難自害 在る仰別業出獄を為す解(原)

別業教康海祐令よまうせ幣別一けりり一教康をさす
其人一和よあつる事いれり一先んて山名に致さるる一
を言ひ又いつくも身とわく一謀をめぐり一山名一と
使をいり先程よりかかんとし別業園一山名出の城
家のより教康に仔細一厚して佐用山を帯をいり入り
せしめり山名園一かく後向三百餘人よ押をさるる事
いりて教よめりいれりぬと之弱きよついで付んといふ

自書

Faint vertical text in a cursive script, likely a handwritten letter or document, spanning the right page.



Faint vertical text on the left page, possibly a signature or date.

Faint vertical text on the left page, possibly a signature or date.

